日本の神学の誕生

ーー『日本宣教神学について』序文

I．模倣から創造へ

日本における神学の成熟

キリスト教は、約二千年前に西欧世界に根を下ろし、
神学は思考の体系として発展してきました。
ギリシア哲学、ローマの法思想、ラテン的秩序、
そしてプロテスタントの個人信仰の強調——
これらが西欧神学の土台を形づくってきました。

西欧神学は普遍性を語りますが、
その言葉と発想は、深く西欧文化に根ざしています。

キリスト教が日本に伝えられたとき、
模倣から始まるのは自然なことでした。
神学校では西欧の教科書が翻訳され、
学生たちは外国の思考枠組みを学びました。
説教も、教理も、論証も、西欧的論理に従って組み立てられてきました。

しかし、日本において模倣は長く続きません。
やがて、静かな違和感が芽生え始めます。

「なぜ、これらの言葉は私たちの心を動かさないのか」
「なぜ、聖書の神は、この国の人々に遠く感じられるのか」

この違和感こそが、
後に「日本の神学」と呼ばれるものの、最初の声でした。

II．抑圧と解放

徳川の沈黙が生んだ霊的エネルギー

徳川時代は戦争を終わらせ、平和をもたらしました。
しかし同時に、人が挑戦し、成長する力を抑え込む時代でもありました。
二百年以上にわたり、日本は強い制約の中で生きてきました。

その沈黙の中で、
感性、規律、そして職人としての力が磨かれていきました。

やがて国の門が開かれたとき、
内に蓄えられていた力は、一気に外へと流れ出しました。

明治期、日本は西欧文明を受け入れました。
しかし、それをそのまま飲み込んだのではありません。
咀嚼し、作り替え、日本の生活に合う形に整えました。
技術、教育、制度、そして宗教もまた、日本化されていったのです。

日本の創造性は、外からの圧力に応答して生まれます。
神学もまた、同じ道を歩むべきでしょう。

III. 復古神道と疑似キリスト教

沈黙していた宗教が語り始めたとき

平田篤胤らによる「復古神道」は、
単なる古代回帰ではありませんでした。
それは、深い霊的渇きから生まれた創造的な試みでした。

言葉を持たず、人格性を欠いていた神道に、
人格神、創造、救済史といった概念が持ち込まれました。
それらは明らかに、キリスト教神学の影響を受けています。

これは単なる模倣ではありません。
沈黙していた日本の宗教が、声を持ち始めた瞬間でした。

言葉を持たない *神（かみ）* が、
語る神である聖書の神と出会ったとき、
両者の混合ではなく、**出会いの中から**新しいものが生まれました。

そこに、日本の神学の最初の種を見ることができます。

IV. 模倣の終わり

職人仕事としての神学

西欧神学を輸入することは、必要な段階でした。
しかし、借り物の思考だけで生き続ける民は、成熟しません。

日本人は、本質的に職人です。
職人は、良いものをそのまま受け取るのではなく、
磨き、整え、生活に合う形に仕上げていきます。

神学もまた、職人仕事です。
聖書は道具であり、教理は素材、
人間の生は作業場です。

この営みの中でこそ、
理論ではなく、**生きられた真理としての日本の神学**が生まれます。

V. 日本人の魂

神のかたちの再発見

日本人の霊性は、自然への畏れと、調和への志向に根ざしています。
これは偶像礼拝ではありません。
創造主への開かれた姿勢です。

聖書はこれを「心に記された律法」と呼びます。
パウロはそれを「霊の律法」と語りました。

日本人は、石に刻まれた律法よりも、
内に響く声を大切にしてきました。

ここに、
神のかたちに造られた人間であることを思い出す信仰
という接点があります。

VI. 日本の神学の使命

世界への贈り物として

日本の神学は、日本人のためだけのものではありません。
それは西欧神学と対話するための、霊的な対話者です。

西欧神学が罪と贖いを中心に据えてきたとするなら、
日本の神学は、創造と関係を中心に据えるでしょう。

失われたものを裁く神学ではなく、
神のかたちを回復する神学です。

それは、人を押し下げるのではなく、
人を起こす神学です。

VII. 結び

沈黙から生まれた神学

日本は、長く沈黙の国でした。
しかし、その沈黙の中で、神は語っておられました。
風の音、虫の声、水の流れの中で。

いま、その沈黙が言葉を得始めています。

模倣から創造へ。
沈黙から言葉へ。
律法から霊へ。

これが、日本の神学の誕生です。

この道を歩みきるとき、
日本の神学は、民族的・地域的なものを超え、
神のかたちに造られた人間の神学となるでしょう。